

▼ 結語ー21 世紀が解かなくてはならない問題

上述のように、アレグザンダーは文脈に適合する良い形を見つけることがデザインの問題だと考えている。そして、文脈とはさまざまな制約条件やユーザー・ニーズなどのデザインの際に考慮すべき諸条件の複雑な網目状の結びつきを意味する。

このアレグザンダーの用語法を 21 世紀の社会システムのデザインという問題に応用することによって、「柔構造社会のデザイン」という問題設定の有効性にわたしは気づいた。

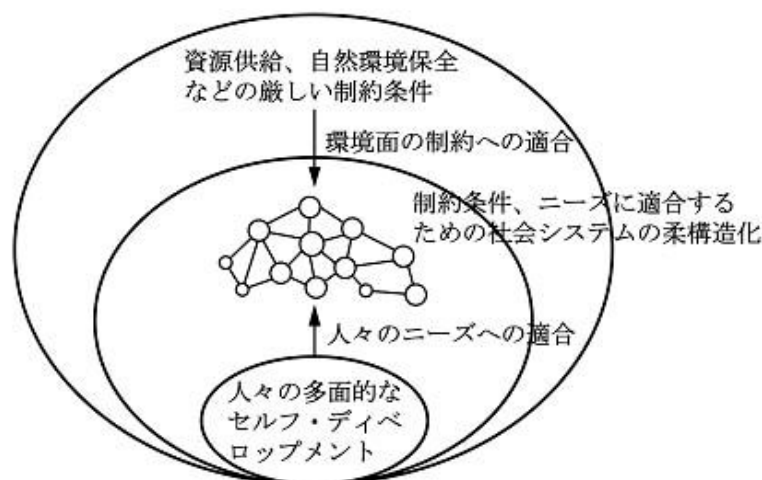
21 世紀には、資源やエネルギー供給や自然環境保全などの面での制約条件がきわめて厳しくなっている。こうした制約の下で、人々が生き生きと暮らし、活動できるように、技術や設計思想、社会システム運営の方法論の転換を進めていかななくてはならない。複雑な文脈にうまく適合するために、21 世紀の社会システムは当然、融通性の高い柔構造をもたなくてはならない。

つまり、図 8-1 を図 17-1 のように描き直すと、「柔構造社会のデザイン」という問題を表すことができる。建築の際のユーザー・ニーズに対応するものは、柔構造社会では「人々の多面的なセルフ・ディベロップメント」だと考えられる。

こうした「柔構造社会のデザイン」という規定は、21 世紀にわたしたちが解かなくてはならない問題の明快な定式化となると言ってよいだろう。

そして、この小論でとりあげたアレグザンダーの〈生きた構造〉と〈生きたプロセス〉(あるいは〈生成的な方法〉)についての考察は、建築と街づくりの分野からの「柔構造社会のデザイン」に向けての徹底的な探究と見なすことができる。アレグザンダーは「パタン・ランゲージ」と "The Nature of Order"を通じて、「柔構造社会のデザイン」のための唯一とは言えないものの、今のところもっとも周到な方法論を提示している。

図 17-1 柔構造社会のデザイン



資源供給や自然環境保全などの厳しい制約条件についての認識が共有されていない時代には、アレグザンダーの方法論は異端的なものに見なされる傾向にあった。しかし、こうした認識が共有されるようになり、その前提の下で 21 世紀にわたしたちが解かなくてはならない問題を「柔構造社会のデザイン」として定式化してみると、アレグザンダーの方法論は王道にあたることがわかる。アレグザンダーは〈文脈感応性〉という言葉で端的に表されるような方法論を一貫して追求してきており、これは「柔構造社会のデザイン」のために求められるものと一致しているからだ。

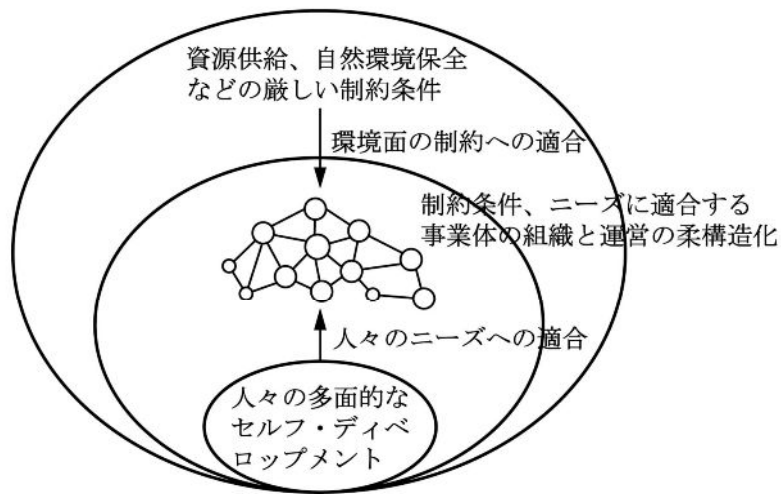
アレグザンダーの考え方を踏まえれば、社会システムの柔構造化のためにボトム・アップ的なアプローチが重要になる。社会を構成するさまざまな主体の行動様式の転換やサブシステムの柔構造化などが相互作用して、徐々に全体としての社会システムの柔構造化が進んでいくような方法論を開発していく必要がある。

民間企業や NPO などの事業体にとっては、図 17-2 に示すように、資源供給や環境保全の面での厳しい制約と多面的なセルフ・ディベロップメントへの要請といった条件に適合できるように、組織や運営方法を柔構造化していかななくてはならない。こうした適合を促進するには、事業体が CO2 排出のコストなどについて中長期的な見通しをもてるような政策的枠組の明確化が重要だ。

また、人々が物的な消費の増大より多面的なセルフ・ディベロップメントを重視するようになるには、20 世紀の自己中心的な拡張主義の動機の体系からの転換が進まなくてはならない。13 章で述べたように、こうした動機の体系の転換は、教育研究、アート&エンターテインメント、ミュージアム、スポーツ等々の良質な社会的共通資本の充実と深い結びつきをもつと考えられる。

さらに、〈生きたプロセス〉を体得でき多面的なセルフ・ディベロップメントへのよい糸口となる〈経験を醸成する場〉を社会の要所要所に埋め込んでいくことが動機の体系の転換を進める有効な方法のひとつとなる。

図 17-2 事業体の柔構造化



こうした〈経験を醸成する場〉として重要なもののひとつがパーマカルチャーだ。典型的な 20 世紀的な農業は、膨大な農業機械のエネルギー、化学肥料、農薬に依存したモノカルチャーの大規模農場だが、オーストラリアのこうした農場の自然破壊に危機感をもったビル・モリソンがはじめた農的な暮らしの運動がパーマカルチャーである。

近代農業は、整然とした農場をつくりそれを維持するために、生態系を単純な状態に制御する大量の労力とエネルギーを投入している。しかし、それは生態系に対して破壊的であるだけでなく、無駄に労力を使っていることにもなると、モリソンは考えた。

そういうやり方ではなく、環境をよく調べその特性を読みとり、生態系の生き生きとした発展を助けながら、その中に人間にとって利用価値のある作物を組み込んでいくという方法を探究した。そうした方法論の集積をパーマカルチャー・デザインと呼んでいる。この方法論では、〈生成的な方法〉の有効性が見事に示されている。

このパーマカルチャーの試みは、人々が自分たちが食べるものになるべく自分で生産するようにして資源供給や環境保全の制約条件に適合しようとすると同時に、自然に対する感受性を育て、自分の中の新たな能力を開拓していくという点で多面的なセルフ・ディベロップメントの効果をもつ。そういう点で、「柔構造社会のデザイン」に向けたアプローチとして、典型的な例のひとつとなる。

パーマカルチャーの方法論の特徴は、できるだけ自然の流れに逆らわず、自然の流れに乗るようにして、人間に利用価値のある作物を組み入れていく、という点にある。こうしたモリソンの考え方は、きわめて老子的と言えるのではないだろうか。「柔構造社会のデザイン」という問題は、老子的な構えと親和性が強いのだろう。

こうした点からもわかるように、アジアのさまざまな文化的伝統を自分たちなりに吸収し再編集してきた日本列島社会は、「柔構造社会のデザイン」の方法論を開拓する上で、ある意味で有利なポジションにある。

例えば、ヨーロッパの建築や音楽は人間の制作物を自然からはっきり識別される秩序として構築しようとするのに対して、日本列島の伝統的な建築や音楽は人間がつくる空間や音と自然とが互いに溶け合うような関係に置こうとする。

中国の伝統音楽の楽器は、明瞭な音階を奏でることができる楽器へと進化する傾向が強いが、日本の伝統音楽の楽器は尺八や三味線のように、ノイズが強調されるような方向への変化を選んでいる。これは、自然と響き合うような音を好むためだと思われる。また、日本の伝統的な建築空間も、ブルーノ・タウトを感激された桂離宮のように、自然と溶け合うような関係をつくり出そうとする。

このように、日本列島の伝統的な美意識の特質は、自然との関係での〈文脈感応性〉を重視する点にある。こうした日本列島の美意識をもとにしながら現代的な視点から鍛え直すことができれば、「柔構造社会のデザイン」ための有効な方法論をつくり出していけると思われる。